

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	小中連携を視野に入れた活動型小学校英語の実践を振り返る : 小学校英語の教科化・低学年化への移行を見据えて
Author(s)	又野, 陽子
Citation	LRT研究紀要 , 3 : 32 - 44
Issue Date	2015-03
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054595
Right	この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認、ご利用ください。 This is not the published version. Please cite only the published version.
Relation	



小中連携を視野に入れた活動型小学校英語の実践を振り返る—小学校英語の教科化・低学年化への移行を見据えて—

又野 陽子

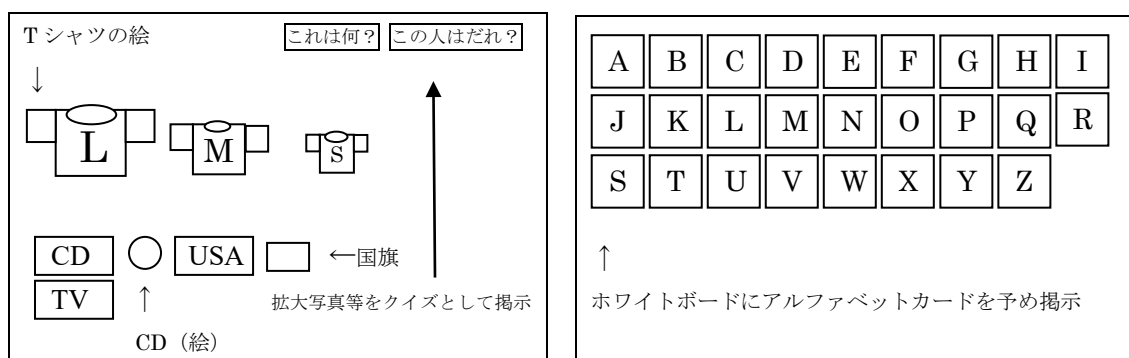
1. はじめに

文部科学省が平成 25 年 12 月に公表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、2020（平成 32）年を見据え、新たな英語教育を本格展開できるよう体制整備等を進めるとし、小学校中学年に活動型として週 1～2 コマ程度、小学校高学年に教科型として週 3 コマ程度の小学校英語教育の導入計画が示されている。その具体化に向けた専門的な見地からの検討のため設置された英語教育の在り方に関する有識者会議が平成 26 年 9 月に「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」としてこれまでの審議をまとめて整理し報告した。これまでの高学年における外国語活動の実績や課題を踏まえて指導や評価に関する改善の方向等が提言されている。今後、中央教育審議会等でさらに議論と検討を進めていくことになるが、こうした英語教育の転換期にあたり、これまで実施してきた小学校高学年における外国語活動を振り返り評価することにより、英語教育改革を見据えた新たな英語教育に備えることは必要な作業であると思われる。本稿では、筆者が小学校高学年に実施し事例として蓄積してきた授業に基づいて、小中の滑らかな接続を視野に入れた活動型小学校英語を振り返ってみたい。

2. 実践事例 1—活動を通した文字の自然な導入—

平成 19 年度末に校区内の小中連携教育協議会の一環として小学校 6 年生に行った出張授業である。当時は、外国語活動のための共通教材としての『英語ノート』が発表される前で、各小学校で何をいつどのように仕組んでいくかといった検討が行われていた。小学校の先生との事前の話し合いで、児童が楽しく活動できる授業を既習の言語材料を用いながら組み立てることとした。What's this?と尋ねる、答える活動は既習であるということであったので、児童の興味・関心を引くような写真、具体物（実物）を示していくことにより、意味のある文脈の中で楽しくコミュニケーション活動が行えるようにした。具体的には、「これは何?」「この人はだれ?」と英語で尋ねながら、ゲームの中の教師と児童のインタラクションを通して英語の音声に慣れ親しませるようにした。例えば、一部のみを写した写真、拡大写真、上から写した写真、横から写した写真、形がネコ型の懐中電灯、着ぐるみを着た人形等を示していった（対話の例：What's this?—It's a cat shaped flashlight. / What's this?—It's a boy wearing a monster suit.）。あるいは、人がスポーツをしているピクトグラムを示して What sport is this?と尋ねたり、飛び出す絵本やふくわらいを活用して Who's this?—It's Shokupanman.等の対話を行った。その後、音から文字へという過程をできるだけスムーズにするために、ゲームからつなげる自然な流れの中でアルファベットの活字体の大文字を導入し、英語の文字に興味・関心を持たせるようにし

た。具体的には、サイズの異なる T シャツの絵 (T シャツに L, M, S の文字が書かれている) を黒板に貼り、What size is this?と尋ね、アルファベットの L, M, S を導入した。引き続き、児童にとって身近なアルファベット (CD, TV, USA) を絵カードや国旗とともに提示、発音して、This is the alphabet.とアルファベットの紹介とした。



What's this? What size is this?

This is the alphabet.

ホワイトボードに貼っておいたアルファベットカードを示しながら単独の文字としての読み方のモデルを与え、1文字ずつ、そして26文字通して、クラス全体、クラスの半分、列、個、再度全体、と変化のある繰り返しにより楽しく英語の音と文字に慣れ親しませる機会をつくった。その後、本時で学習したアルファベットの読み方に関連した歌 (ABCのうた〜おほしさま) を歌い、メロディーとリズムにのせて学習事項のまとめを行った。

3. 実践事例2—絵本 (ライム) を活用した活動—

平成22年度及び23年度に校区内の小学校6年生に実施した出張授業である。この頃は、『英語ノート』の内容をもとにしたICTの教材も配布され、外国語活動の環境が整備されてきた時期であり、『英語ノート』の内容も視野に入れながら授業を組み立てた。出張授業では、絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* (Bill Martin, Jr. 作、Eric Carle 絵) を活用した授業を行った。読み聞かせ前に行う活動として、色と動物の名前の導入を行った。色折り紙を黒板に貼り、What color is this?と児童に尋ねながら色の名前のモデルを与えたり、絵本に出てくる動物の名前を導入するために縫ぐるみや絵カードを用いた。児童が興味を持ち注目するように動物の絵が徐々に見えるようなクイズ形式にする等、提示方法に工夫をした。色や動物の名前を導入した際は、それぞれ陰山・藤井(2006)付録のチャンツCDを使用してリズムに合わせたり速さを変えたりして楽しみながら色や「色＋名詞」のチャンツを行った。読み聞かせ中に行う活動としては、大型英文絵本 (Martin and Carle, 1999) を使用し、物語と教師 (語り手) と児童が相互交流するようなコミュニケーションの場を提供するようにした。最後の見開きページや黒板の絵カードも指し示しながらストーリーの流れや各ページのつながりを確認した。読み聞かせ後に行う活動としては、チャンツ (Martin and Carle(1996)付録のCD#4) やストーリーソング (同CD#2) をCDに合わせて歌うフォローアップを行った。また Ellis and Brewster (2002/2008: pp.75-76) に紹介されているクラスブックの作成から示唆を得て、*Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* をもとにした児童たちのオリジナルのストーリーを作成した。

What does this bear see? A red bird. What does this red bird see? A yellow duck....
 (つながりの確認後、絵を指し示しながらストーリーソングの歌唱)

Let's make our original story. In this story we will use your drawings of your favorite animals. [Color+animal], [color+animal], what do you see?— I see a [color+animal] looking at me. ([Color+animal]の部分に児童の作品として描かれた色と動物名を組み込んでストーリーを紡ぐ)

4. 実践事例3—絵本（物語体）を活用した活動—

平成24年度に校区内の小学校6年生に実施した出張授業である。外国語活動教材“Hi, friends!”が新たに配布され、中学校の教科書も一新された時期である。本授業では、絵本 *The Very Hungry Caterpillar* (Eric Carle) を教材として扱った。読み聞かせ前に行う活動として、まず絵本に出てくる果物の名前 (apple, pear, plum, strawberry, orange) をクイズ (What fruit is this?) により導入した。絵本に出てくる果物の数に合わせて絵カードを増やして貼っていき、「数+名詞」の語順を陰山・藤井(2006)付録のチャンツCDのリズムに合わせて速さを変えながら練習した。チョウの一生に関する語彙、曜日、形容詞に関しては、児童の興味・関心を引くような模型や絵カードを提示しながら児童と英語によるインタラクションを行いながら提示した。小学校3年生時の理科の授業の「チョウを育てよう」の単元も思い起こさせることにより、児童の生活や他教科の学習との関連性も持たせるようにした。おもちゃのたまごを示し、たまごから生まれる生き物を挙げさせたり、このたまごの中には何が入っているかヒントとしてペーパー・クラフト作品を少しずつ黒板に両面テープで貼っていきながら考えさせた。そして次のような発話をしながら黒板に絵カードを貼っていきチョウの一生を示した。“What is a caterpillar before it becomes a caterpillar? An egg. How big is the egg? The egg becomes a caterpillar. At first it is a tiny caterpillar. It grows bigger and bigger. This is a big, fat caterpillar. (ジェスチャーとともに大小の縫ぐるみを提示) What does a caterpillar make to become a butterfly? A cocoon. What comes out of the cocoon? This is the life-cycle of the butterfly. You have learned about butterflies in third grade science class.” また、曜日の下に1枚ずつ葉の絵を貼っていきながら “On Monday it eats a leaf. On Tuesday it eats a leaf... On Sunday it eats a leaf. It eats a leaf every day.” と発話し曜日とleafという語を導入した。

又野陽子

学校の教えている絵

自動車の絵

チョウの一生 (絵カード)

ペーパー・クラフト作品 (スクエアボックス)

りんご

西洋なし

西洋なし

月火水木金土日

1枚ずつ葉を貼る

すいかの絵

西洋なしの絵

プラムの絵

プラム

いちご

いちご

いちご

いちご

オレンジ

オレンジ

オレンジ

オレンジ

果物の絵カード (One apple./Two pears./...Five oranges.)

What fruit is this? □□□□□

↑ (並べるとアオムシの姿になる4つのスクエアボックスを少しずつ黒板に両面テープで頭まで貼っていく) (おもちゃのたまごの中にアオムシの小さな縫ぐるみを入れておく→たまごが割れるとアオムシが顔をのぞかせる)

(両手に大小のアオムシの縫ぐるみを持って生徒に語りかける)

縫いぐるみ (小)

縫いぐるみ (大)

an egg → a tiny caterpillar → a big, fat caterpillar → a cocoon → a butterfly (絵カード)

月 火 水 木 金 土 日

読み聞かせ中に行う活動として、大型英文絵本(Carle, 2002)を用いて、寺井編著(2009)の提案する読み手と聞き手が協同して音読の世界を創り上げる活動を英文絵本の読み聞かせに応用することとした。今回の授業では、絵本 *The Very Hungry Caterpillar* のテキストの特性を鑑みて、繰り返し使われている言葉 (hungry) を児童も一緒に言うようにして参加を促す唱和型、繰り返し出てくる言葉 (hungry) に合わせて簡単な動作 (お腹に手をあてる動作) を一緒にやってもら参加のさせ方 (動作型)、聞き手に話の展開を予想してもらいながら話を進めていく問いかけ型を取り入れた。

問いかけの例

(お腹をすかせたアオムシのページを児童に示す)

The caterpillar is very hungry.
What do you think the caterpillar is going to do?

(最後にチョウになったページを児童に示す)

Did you like this story?
Which part did you like? Why?

積極的に多くの英語を用いながら児童との相互交流を行い児童を絵本の世界に導いた後、Carle(2005)付録の CD#1 によるストーリーリーディングを聴かせることにより、物語の繰り返しや累進性を認識させるようにした。読み聞かせの後のフォローアップとしては、好きな果物を話題とした対話を行った。まずは、絵本に出てきた果物の名前を楽しみながら復習したり語彙を拡大することができるような活動(フルーツボンゴゲーム)を行った。その後、「好みについて尋ねる—好みを伝える」といったゲームの中の対話の枠組みを実際のコミュニケーションの文脈における対話へと発展させた。真に情報を伝え合うために言語を使用する経験につなげるためである。その際に、教師対児童の対話(教師→児童、児童→教師の2つの方向)、児童対児童の対話など、多様な形態のインタラクションと話者間の方向性を教室内につくるようにした。尋ねる表現(Which~?/What~?)については、使用前に全体で繰り返し練習する時間を設けた。

ゲーム

P: (5つの果物を予め選びしるしをつけておく。声をそろえて) Which fruit do you like?

T: (シート中から適宜選択して例えば) I like apples.

P: (予めりんごを選んでしるしをつけていたらチェックをつけて消す。選んでいた5つの果物すべてにチェックがついて消えたら「ボンゴ!」でゲーム終了)

メロン	すいか	グレープ フルーツ	キウイ
パイナップル	りんご	なし	プラム
いちご	オレンジ	レモン	さくらんぼ
バナナ	もも	ブルーベリー	ぶどう

←果物のイラストも添えてあるシート(好きな果物を5つ選択)

黒板

T: (シート中から適宜選択して答える) I like _____.

↑

P: (声をそろえてたずねる)
Which fruit do you like?

P: (チェックをつけながら英語を聞く)

実際のコミュニケーション

(T⇔P) T: What fruit do you like really?

What fruit do you like, P1?

P1: I like watermelon.

(向かい合って対話する)

P1→ ←T

(P⇔P) P1: What fruit do you like, P2?

P2: I like oranges.

(向かい合って対話する)

P1→ ←P2

(P⇔T) P: What fruit do you like, Ms. Matano?

T: I like watermelon, pears, and plums.

(この出張授業の最初に教師の好きな果物を自己紹介の中で英語で述べていた。授業の最後が授業の最初の自己紹介の内容に収束する授業の枠組みであった)

T: (授業の最初の自己紹介で用いた好きな果物の絵を指し示しながら答える)

P: (声をそろえて尋ねる)

(T: 教師, P: 児童)

5. 3つの実践の成果

3つの実践の成果としては、小中のなめらかな「つなげ方」に焦点をあてた授業の提案と、それらの授業を通して児童の学びや変容をとらえることができたことである。

(1) 小中の「つなげ方」に焦点をあてた授業の提案

① 文字の導入方法

音から文字へゲームからの自然な流れの中で導く等、文字の導入方法についての提案を実践事例1を通して行った。L, M, S とサイズの異なる T シャツの絵を用いるなど、児童の生活に身近なアルファベットを視覚的にわかりやすく導入した。実践事例2、3に関連した提案としては、小学校で使用した絵本を中学校以降も発音と綴りとを関連付けた指導や音読教材として継続的に使用することでスムーズな読みへ移行させていくことが挙げられる。

② 指導方法の連続性

実践事例1, 2, 3ともに、小学校で取り入れられている歌、チャンツ、クイズ、ゲーム等の活動を継続し、教材や活動の提示の際には学習者に身近な具体物、絵や写真、教師による言葉やジェスチャー等の方法を内容と適切に組み合わせる工夫をした。実践事例2, 3で問いに答えたりキーになる語彙や語句を繰り返しながら読み聞かせに参加する経験や、教師が生徒の持つ知識、経験、興味、関心を引き出しストーリーに関連付ける点は、中学校の内容中心のオーラル・イントロダクションやオーラル・インタラクションにつながる方法でもある。また、オリジナルの絵本作りといったタスクを志向した活動(実践事例2)は、中学校以降のタスク活動に生かされる経験である。指導方法を継承し連続性を持たせることも滑らかな接続に必要な視点であると思われる。

③ 場面や機能面での接点

場面や機能面での接点ということも視野に入れて授業を組み立てた。具体的には、実践事例1では順次写真や実物を提示していきながらコミュニケーションの場面を設定し、例えば事実を伝える (It's a lemon. など) といったコミュニケーションの働きを意識した指導を行うことを試みた。実践事例2で取り上げた絵本では、「質問する」「答える」という機能、実践事例3の読み聞かせ後の活動では「好みについて尋ねる」「好みを伝える」という機能を扱ったが、これらは中学校の教科書にも見られる機能である。中学校で扱われる機能に小学校の段階から繰り返しやライムによって自然に楽しく触れることができるような授業を試みた。

④ 中学校の言語材料との接点

実践事例1, 2, 3では wh-疑問文とその答え、活動の中で提示(使用)された語や慣用表現、実践事例2では色、動物、実践事例3では曜日、数、果物、色、食べ物、形容詞、実践事例2, 3共通して「形容詞+名詞」の語順等が含まれていたが、これらは子どもたちが中学校で文法事項や語として再び出会うことになるものである。こうした言語材料に関して、クイズや絵本の読み聞かせを通して音声によるインプットを十分に与えることで児童の気付きを促し、具体的な活動を通して基本的な表現に慣れ親しませるようにした。音声面ではストーリーソングを聞いたり歌ったりチャンツをしたりすることを通して英語特有のリズムやイントネーションを体得させ、中学校

で基本的な英語の音声の特徴を捉えるための素地を養いたいと考えた。中学校での取り組みとしては、中学校に入学して文法事項の導入や説明をする際に、今回行ったクイズの形式を用いることで生徒の記憶を想起させたり、Twenty Questions や Who am I?などのコミュニケーション活動で有用な語（動物や色、果物の名前等）を今回使用した絵本で再度復習してから活動に入ることも試みた。

⑤ 学習ストラテジーの接点

実践事例2では、比較する、予測する、順序に従って並べる、記憶する、既習の内容を活用する等の学び方、実践事例3では、比較する、分類する、予測する、順序づける、仮説を立てる等の学び方が関連している。中学校で言語活動を行う場合にも、例えば順序づける学習ストラテジーを文と文のつながりなどに注意して文章を書く際に用いるなど、活動のタイプに関連した適切なものを継続して提示し使用を促していきたい。

⑥ 教室英語の使用

実践事例1, 2, 3を通して教室英語を積極的に用いるようにした。特に、物語体の絵本を用いた実践事例3においては、チョウの一生についての説明を児童にとって理解可能なインプットにするための工夫（模型、縫ぐるみ、絵カード、ペーパー・クラフト作品等の提示やジェスチャーの使用等）を行った。英語の授業の中で教師が多くの英語を使うことにより、教室内に英語を話す雰囲気をつくり、子どもたちが教師の言うことに注意深く耳を傾けるようになることを Gardner and Gardner (2005)も指摘している。こうした指摘からも、教室英語を小中で継続的に使用し、子どもの発達段階や学習内容に応じて少しずつ英語の量や内容を発展させていくことを心がけていきたい。

⑦ 学習者との関連性と真正性を持つ対話

実践事例3において、読み聞かせ後にゲームと対話を行ったが、外国語活動において、可能な活動に関してはこのようにゲームからさらに学習者の実際の生活、興味・関心に関連性(relevancy)のある対話へと発展させていく視点を持つことを提案した。実際に友達や先生が好きな果物を知るための対話は真正性(authenticity)を持ち、実際の言語の使用場面に即した中学校での言語使用(use)へつながる内容であると思われる。

⑧ 多様なインタラクション

実践事例3において対話を行った際に、教師対児童の対話(教師→児童、児童→教師の2つの方向)、児童対児童の対話といった多様なインタラクションを教室内につくるように試みた。このことは、生徒のアウトプットに対してインタラクションの中でフィードバックしたり、インタラクションに全体の生徒を取り込み、さらに個別の生徒にもどしたりするといった展開を中学校以降行う際につながる授業の枠組みであると思われる。

(2) 児童の学びと変容

Dörnyei(2003)は、児童に対してリカート尺度を用いる場合、1つの質問に対する応答の選択肢を3つに絞り、言葉の代わりに絵の形態を用いて選択肢を提示することを提案し

ている。そこで、今回実践事例1, 2, 3ともに、児童の振り返りシートを作成する際に参考にし、各問いに対して3つの選択肢 (Very good, Good, Not so good) を顔文字 (☺, ☹, ☹) によって提示した。児童は自分の思いにあてはまる顔文字を色鉛筆で塗ることで自己省察を行った。各問いに対する児童の自己評価結果 (表1, 2, 3) から児童は本授業を肯定的に捉えている傾向が見られる。英語の音やリズム、文字や語彙への慣れ親しみに関しては、この1回の授業だけでなく小中のスパンでスパイラルに取り組んでいく必要性が示唆された。また、表3中で絵本の内容理解や教室英語の理解に関する項目に困難を感じたという反応を示した児童であっても自由記述欄には「だいたいわかったのでよかった。少しは理解もできてすごくわかりやすかったです」「ハングリーとか果物の名前とかがわかった」という記述があり概要やキーワードの把握はできていたことがうかがえた。また、「先生の英語を一生懸命追いかけてだんだんわかってきてゲームで追いつくことができました。今日の授業はとても楽しかったです」という記述から、教師の発話をしっかり聞いて理解しようとした姿勢も伝わった。授業への積極的な取り組みに対する項目に課題を感じた児童も自由記述欄には「わかりやすかった」「勉強できてよかった」と記述していた。ただ、「英語が苦手なので」とか「ぼくは英語は少し苦手です。だけど今日の授業で少し楽しくなりました」と記述していた児童もいたことから、小学校段階からすでに英語に苦手意識を持っている児童への支援をいかにしていくかが課題として挙げられた。

表1. 実践事例1における児童の自己評価結果 (人) (平成19年度出張授業)

	☺	☹	☹
1. 今日の授業は楽しかったですか。	44	5	0
2. すすんで一生懸命に授業に参加できましたか。	37	12	0
3. 絵やカードを見て英語で言うことができましたか。	37	12	0
4. 先生の話す英語の説明や自己紹介はよくわかりましたか。	40	9	0
5. 英語の音や文字になれることができましたか。	29	19	1

N=49 (6年1組23人、6年3組26人の合計)

表2. 実践事例2における児童の自己評価結果 (人) (平成22年度出張授業)

	☺	☹	☹
1. 今日の授業は楽しかったですか。	55	10	0
2. すすんで一生懸命に授業に参加できましたか。	47	18	0
3. 色や動物のカードを見て英語で言うことができましたか。	58	7	0
4. 絵本のお話の内容はよくわかりましたか。	60	5	0
5. 英語の音やリズムになれることができましたか。	46	19	0

N=65 (6年1組34人、6年5組31人の合計)

表3. 実践事例3における児童の自己評価結果（人）（平成24年度出張授業）

	😊	😐	😞
1. 今日の授業は楽しかったですか。	173	7	0
2. すずんで一生懸命に授業に参加できましたか。	120	58	2
3. 絵本のお話の内容はよくわかりましたか。	153	25	2
4. 先生の話す英語は理解できましたか。	110	68	2
5. 絵やカードを見て数字や果物、曜日を英語で言うことができましたか。	143	36	1
6. 英語の音やリズムになれることができましたか。	146	33	1

N=180（6年1組30人、6年2組31人、6年3組30人、6年4組27人、6年5組31人、6年6組31人の合計）

表3中の評価項目3において180人中153人の児童がVery good.（😊）を選択していたが、その理由の内訳は以下のとおりであった（一人の児童が複数の内容を記述していた場合があったため、理由の人数は延べ人数）。読み聞かせ前の活動で予め内容理解に必要な言葉を導入しておくことや読み方の工夫が効果的であったこと、教師とのインタラクションを通して内容理解を深めたこと等が示唆されていた。

絵本のお話の内容はよくわかりましたか。

😊 153人

（理由）①日本語の話を読んだ（聞いた）ことがあったから 80人

②先生の説明や読み方がわかりやすかった（教師の工夫）66人

- ・難しそうなところは日本語もそえてくれた 18人
- ・絵本を読む前に必要な言葉を説明（紹介）してくれていた 15人
- ・わかりやすく丁寧に説明しながら話してくれた 12人
- ・ジェスチャーがわかりやすかった 8人
- ・ゆっくり（とめて）読んでくれた 3人
- ・やり方がうまかった 3人
- ・発音や言い方がよく聞きやすかった 3人
- ・先生の後について一つひとつ発音していきながらだから 2人
- ・先生が聞き返してくれた 1人
- ・繰り返し言ってくれた 1人

③今まで習ってきた英語（知っている言葉）がたくさんあったから 7人

④言葉と絵で理解できた（絵本の効用） 4人

④後でゆっくりと考えたから 1人

理由の未記入者8人、理由ではなく「よくわかった内容」を記入していた児童3人

また、表3中の評価項目4において180人中110人の児童がVery good.（😊）を選択していたが、その理由の内訳は以下のとおりであった（一人の児童が複数の内容を記述し

ていた場合があったため、理由の人数は延べ人数)。児童の理解度に応じて繰り返しやスピードの調節、適切な言語的修正を行ったり、視覚教材やジェスチャーの使用、場合によっては日本語をそえることが児童の理解を助けることにつながったことが示唆されていた。

先生の話す英語は理解できましたか。

😊 110人

(理由) ①難しそうなところは日本語もそえてくれた 34人

②先生の話し方がよかった 27人

- ・声が聞きやすい 9人
- ・何回も英語を理解するまで言った 7人
- ・発音がとても上手でわかりやすい 6人
- ・ゆっくり言ってくれるところがあった 2人
- ・わかりやすく話してくれた 1人
- ・大きい声ではっきり言ってくれた 1人
- ・楽しい雰囲気 1人

③ジェスチャーでわかった 18人

④絵などいろいろな物を使ってわかりやすい説明だった 12人

⑤自分自身がこれまでに英語に触れている (CD、テレビ、習っている等) 10人

⑥知っていることば (聞いたことのある英語) がたくさんあった 9人

⑦順序良く説明してくれた 1人

⑧理解できるようにしてくれた 1人

⑨本は見たことがあったので読み聞かせ中のやり取りがわかった 1人

理由の未記入者3人、理由ではなく「よくわかった内容」を記入していた児童2人

また、振り返りカードには授業の感想を記入する欄も設け、その記述からも児童の学びをとらえたいと考えた。

実践事例1における児童の感想 (抜粋)

- ・中学校の授業はこんなに楽しいのだとよくわかった。よく理解できたし、中学校に行ったらこんな授業ができるので楽しみです。
- ・先生が中1で英語を教えてくれたら楽しそうと思った。
- ・先生の口の動かし方やしゃべり方をまねしてがんばった。だから先生に良い発音と言われたときはすごくうれしかった。中学校でもがんばれるような気がしてきた。
- ・楽しく英語の授業をすることができました。この授業を受けたことで、英語に自信ができました。中学校に行っても英語に困ることはないと思います。
- ・英語にはいろいろな発音があって楽しかったです。
- ・今日の授業は英語の発音や文字を知ることができたのでとても楽しかったです。中学生になって習ったことを生かしたいです。

実践事例2における児童の感想（抜粋）

- ・とても楽しかったので早く中学校の英語をしたいです。中学校に行ったら又野先生と英語の学習をするのが楽しみです。
- ・先生の教え方がすごく上手くてとってもわかりやすく教えてもらえてよかったです。
- ・絵本の内容もよくわかったし、英語のリズムにも慣れました。英語をリズムよく言うことは楽しかったです。中学校の英語もとっても楽しみです。
- ・絵本は全部英語で言っていたけど絵を貼っていたのでよくわかりました。
- ・「青い馬」など見たことのない色の馬などが描いてあって楽しかったです。またこの授業をしてみたい。
- ・ぼくが描いた亀がボードに貼られたので楽しかった。
- ・いろいろな色の動物が言えるようになりました。絵本も楽しかったです。もっと英語を読めたり言ったりができれば、本を自分で読んでみたいです。
- ・動物の名前がたくさん覚えられました。楽しかったです。

実践事例3における児童の感想（抜粋）

- ・先生が何を言っているか聞き取りやすかった。みんなが参加できる授業でとても楽しかった。絵本の単語をわかりやすく言ってくれたので絵本の内容がよくわかった。ますます中学校の英語が楽しみになった。
- ・中学校ではこんな授業なのかと感心しました。このような授業を早くやってみたいです。
- ・又野先生は本格的な授業でわかりやすかったです。
- ・やっていくうちに英語で聞かれるのに慣れました。ぼくが一番うれしかったことは、英語をしゃべったらとてもよくほめられたことがとてもうれしかったです。
- ・クイズやリズムにのって言っていって楽しかったです。何回も発音していったので、この授業だときれいな発音で覚えられそうだなと思いました。
- ・今日の授業はすごく楽しいしわかりやすかったです。理由は、又野先生はいろいろな物を使って教えてくれたのでわかりやすかったです。
- ・キャピラーにも小さいや大きいや太いなどの英語をつけるんだと初めて知った。
- ・今日やったように、大きいとか小さいとか丸いとか色の名前とか一つの言葉を覚えるといういろいろなものと合体させて言葉ができたのがわかった。
- ・今日は果物の英語がよくわかったので勉強になりました。リズムもわかってよかったです。中学生になっても英語のことを勉強して先生みたいにペラペラになりたいです。今日はぼくたちのために一生懸命教えてくれてありがとうございました。

これらの記述から、今回の授業が中学校の学びへの希望と自信、動機づけにつながったことが伝わってきた。それと同時に、英語にはいろいろな発音があるといった気付きや、外国の絵本への興味・関心が深まったという内容の記述も見られた。チャンツや読後の創造的な活動の楽しさも述べられており、絵本の楽しさが「本を自分で読んでみたい」といった思いや願いにつながった児童もいた。また、「英語の発音や文字を知ることができた」「動物の名前がたくさん覚えられた」といった記述もあり、英語に慣れ親しむ活動が結果として英語を知ったり覚えたりといった習得を促している点も示唆された。

6. まとめと今後の展望

小学校英語の教科化・低学年化が行われた際にも、本稿で提案したような小中を滑らかにつなげるために必要な視点は引き続き配慮されるべきことであると思われる。その必要な視点とは、音声コミュニケーションから文字コミュニケーションへと丁寧に導いていくこと、場面や機能、言語材料、学習ストラテジー、指導方法のつながりを大切にすること、教室英語を英語学習のそれぞれの段階で少しずつ発展させながら継続的に使用していくこと、学習者との関連性と真正性を持つ対話へと発展させていく視点を持ち、多様なインタラクションを教室内につくること等である。

英語教育の在り方に関する有識者会議は「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」に関連して、小・中・高を通じた目標及び内容の主なイメージを参考資料として示しているが、それによれば小学校高学年の目標の中にアルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読むことに対する興味を育てることや、アルファベットを書くことに慣れ親しみ、英語を書くことに対する興味を育てることが含まれている。内容のポイントとしても場面や状況に依拠して聞くこと・話すこととともに、文字の認識、単語の識別が挙げられている。今後、小学校で文字が扱われた場合には、絵カードに絵とともに文字も書いておき文字に興味を持たせたり、文字列の特徴から絵カードとマッチングさせる活動を行うなど、文字に慣れ親しむ時期を経験させ、読み書きの指導に滑らかにつなげていくことが大切であろう。その際に、本稿で提案したような小中をつなぐ懸け橋となるような授業の枠組みや教材が参考資料となる可能性もある。また、今回の実践の中で「キャタピラーにも小さいや大きいや太いなどの英語をつけるんだと初めて知った」「今日やったように、大きいとか小さいとか丸いとか色の名前とか一つの言葉を覚えるといろいろなものと合体させて言葉ができたのがわかった」という記述を振り返りコメントの中で書いていた児童がいたが、この記述は語順への気付きを示唆しているものであると思われる。語順に関しては、今回の事例であれば、文字列の代わりに色や形とその物の絵を並べて黒板に貼り視覚的にわかりやすく提示する方法（例えば緑の色折り紙と葉っぱの切り抜きを並べて a green leaf）や、日本語の語順を参照させて指導することも考えられる（修飾関係が日本語と同様の場合は、「日本語でも○○色の△△」等）。文字、語順ともに教科だからこそできる系統立てた指導方法を研究し積み上げていくことが必要である。

【参考文献】

Carle, E. (2002). *The very hungry caterpillar*. [A storytime giant book for shared reading]. Edinburgh Gate: Pearson Education Ltd.

Carle, E. (2005). *The very hungry caterpillar*. London: Penguin Books Ltd.

Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: construction, administration, and processing*. London: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers.

Ellis, G., & Brewster, J. (2008). 『先生、英語のお話を聞かせて！ 小学校英語「読み聞かせ」ガイドブック』（松香洋子監訳、八田玄二・加藤佳子訳）。東京：玉川大学出版部。原典 2002 年発行（第 2 版）。

- Gardner, B., & Gardner, F. (2005). 『教室英語ガイド』(松川禮子監修、平松貴美子訳). 東京: 旺文社. 原典 2005 年発行.
- Martin, B., Jr. (Author), & Carle, E. (Illustrator). (1996). *Brown bear, brown bear, what do you see?* [Board book edition]. New York: Henry Holt and Company.
- Martin, B., Jr. (Author), & Carle, E. (Illustrator). (1999). *Brown bear, brown bear, what do you see?* [Storytime giant book for shared reading]. London: Longman.
- 陰山英男・藤井弘之(2006). 『陰山英男&藤井弘之の反復練習英語暗唱ノート』東京: 株式会社アルク.
- 寺井正憲編著. (2009). 『聞き手参加型の音読学習』東京: 株式会社東洋館出版社.
- 又野陽子(2009). 「小学校外国語活動と中学校外国語教育の結び方」*YASEELE* (山口大学英語教育研究会紀要), No.13, 29-38.
- 又野陽子(2013a). 「小学校から中学校へつなぐ英語の授業実践事例」『LRT 研究紀要』第 1 集, 36-42, 54 下.
- 又野陽子(2013b). 「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法—絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*を教材として—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.43, 41-50.
- 又野陽子(2014a). 「絵本 *The Very Hungry Caterpillar* を活用した外国語活動」『山口県中学校教育研究会英語部会研究集録』第 29 集, 32-36.
- 又野陽子(2014b). 「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法—絵本 *The Very Hungry Caterpillar* を教材として—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.44, 81-90.
- 文部科学省. (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
- 文部科学省 英語教育の在り方に関する有識者会議. (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」

(山口市立平川中学校)